

雀こ
井伏鱒二へ。津軽の言葉で。
太宰治

【テキスト中に現れる記号について】

《 》：ルビ
(例) 昔噺《むがしこ》

[#]：入力者注 主に外字の説明や、傍点の位置の指定
(例) [#ここから2字下げ]

[#ここから2字下げ]
長え長え昔噺《むがしこ》、知らへがな。
山の中に椽《とち》の木いっぽんあったずおん。
そのてっぺんさ、からす一羽来てとまったずおん。
からすあ、があて啼《な》けば、椽の実あ、一つぼたんて落づるずおん。
また、からすあ、があて啼けば、椽の実あ、一つぼたんて落づるずおん。
また、からすあ、があて啼けば、椽の実あ、一つぼたんて落づるずおん。

.....
[#ここで字下げ終わり]

ひとかたまりの童児《わらわ》、広《ふる》い野はらに火三昧《ひざんまい》して遊びふけていたずおん。
春になればし、雪こ溶け、ふろいふろい雪の原のあちこちゆ、ふる野の黄はだの色の芝生こさ青い新芽の萌えいで来るはで、おらの国のわらわ、黄はだの色の古し芝生こさ火をつけ、そればさ野火と申して遊ぶのだおん。そうした案配《あんばい》こ、おたがい野火をし距《へだ》て、わらわ、ふた組にわかれていたずおん。かたかたの五六人、声をしそろえて歌ったずおん。

雀、雀、雀こ、欲《ほ》うし。
ほかの方図《ほず》のわらわ、それさ応《こた》え、
どの雀、欲うし？
て歌ったとせえ。
そこでもってし、雀こ欲うして歌った方図のわらわ、打ち寄り、もめたずおん。
誰をし貰ればええべがな？
はにやすのヒサこと貰れば、どうだべ？
鼻たれて、きたなきも。
タキだば、ええねし。
女くされ、おかしじゃよ。
タキは、ええべせえ。
そうだべがな。
そうした案配こ、とうとうタキこと貰るようにきまったずおん。
右《みぎ》りのはずれの雀こ欲うし。
て、歌ったもんだずおん。
タキの方図では、心根っこわるくかかったとせえ。
羽こ、ねえはで呉れらえね。
羽こ呉れるはで飛んで来い。
こちで歌ったどもし、向うの方図で調子ばあわれに、また歌ったずおん。
杉の木、火事で行かえない。
したどもし、こちの方図では、やたら欲しくて歌ったとせえ。
その火事よけて飛んで来い。
向うの方図では、雀こ一羽はなしてよこしたずおん。タキは雀こ、ふたかたの腕こと翼みんたに拵げ、ばお、ばお、ばお、て羽ばたきの音をし口でしゃべりしゃべりて、野火の焰よけて飛んで来たとせえ。
これ、おらの国の、わらわの遊びごとだおん。こうして一羽一羽と雀こ貰るんだどもし、おしめに一羽のこれば、その雀こ、こんど歌わねばなんねのだおん。

雀、雀、雀こ欲うし。

とっくと分別しねでもわかることだどもし、これや、うたて遊びごとだまさね。一ばん先に欲しがられた雀こ、大幅《おおはば》こけるどもし、おしめの一羽は泣いても泣いても足《た》えへんでは。
いつでもタキは、一ばん先に欲しがられるのだずおん。いつでもマロサマは、おしめにのこされるのだずおん。

タキ、よろずよやの一人あねこで、うって勢よく育ったのだずおん。誰にかても負けたことねんだとせえ。冬、どした恐ろしい雪の日でも、くるめんば被《かぶ》らねで、千成《せんなり》の林檎《りんご》こよりも赤え頬べたこ吹きさらし、どこさでも行けたのだずおん。マロサマ、たかまどのお寺の坊主《ぼんず》こで、からだつきこ細くてかそべないはでし、みんなみんな、やしめていたのだずおん。

さきほどよりし、マロサマ、着物ばはだけて、歌っていたずおん。

雀、雀、雀こ欲うし。雀、雀、雀こ欲うし。

不憫《ふびん》げらに、これで二度も、売えのこりになっていたのだずおん。

どの雀、欲うし？

なかの雀こ欲うし。

タキこと欲しがののだずおん。なかの雀このタキ、野火の黄色え黄色え焰ごしに、悪だまなくこでマロサマば睨《にら》めたずおん。

マロサマ、おっとらとした声こで、また歌ったずおん。

なかの雀こ欲うし。

タキは、わらわさ、なにやらし、こちょこちょと言うつけたずおん。わらわ、それ聞き、にくらにくらて笑い笑い、歌ったのだずおん。

羽こ、ねえはで呉れえね。

羽こ呉れるはで飛んで来い。

杉の木、火事で行かえない。

その火事よけて飛んで来い。

マロサマは、タキのばおばおて飛んで来るのば、とっけらとして待つていたずおん。したどもし、向うの方図で、ゆったらと歌ののだずおん。

川こ大水で、行かえない。

マロサマ、首こかしげて、分別したずおん。なんて歌ったらええべがな、て打って分別して分別して、

橋こ架けて飛んで来い。

タキは人魂《ひとだま》みんな眼《まなく》こおかなく燃やし、独りして歌ったずおん。

橋こ流えて行かえない。

マロサマは、また首こかしげて分別したのだずおん。なかなか分別は出て来ねずおん。そのうちにし、声たてて泣いたのだずおん。泣き泣きしゃべったとせえ。

あみださまや。

わらわ、みんなみんな、笑ったずおん。

ぼんずの念仏、雨、降った。

もくらもつけの泣けべっちょ。

西くもて、雨ふった。雨ふって、雪とけた。

そのときにし、よろずよやのタキは、きずきずと叫びあげたとせえ。

マロサマの愛《め》ごこや。わのこころこ知らずて、お念仏。あわれ、ばかくさいじゃよ。

そうしてし、雪だまにぎて、マロサマさぶつけたずおん。雪だま、マロサマの右りの肩さ当り、ぱららて白く砕けたずおん。マロサマ、どってんして、泣くのばやめてし、雪こ溶けかけた黄はだの色のふる野ば、どんどん逃げていったとせえ。

そろそろと晩げになったずおん。野はら、暗くなり、寒くなったずおん。わらわ、めいめいの家さかえり、めいめい婆《ば》さまのこたつこさもぐり込んだずおん。いつもの晩げのごと、おなじ昔噺《むがしこ》をし、聞くのだずおん。

[# ここから2字下げ]

長え長え昔噺《むがしこ》、知らへがな。

山の中に橡の木いっぽんあったずおん。

そのてっぺんさ、からす一羽来てとまったずおん。

からすあ、がて啼けば、橡の実あ、一つぼたんて落づるずおん。

また、からすあ、がて啼けば、橡の実あ、一つぼたんて落づるずおん。

また、からすあ、がて啼けば、橡の実あ、一つぼたんて落づるずおん。

.....

[# ここで字下げ終わり]

底本：「太宰治全集1」ちくま文庫、筑摩書房

1988（昭和63）年8月30日第1刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版太宰治全集」筑摩書房

1975（昭和50）年6月～1976（昭和51）年6月

入力：柴田卓治

校正：丹羽倫子

1999年9月12日公開

2005年10月20日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。